

# 研究結果報告書

## 研究結果

京杭大運河は開通以来、中国の南北を繋がる最も重要な水上ルートである。その文化は漕運をはじめ、商業会館・民間信仰・書院・文学・蔵書楼・建築・風俗・芸能・芸術などあらゆる面を含めている。南北に散在していたいくつかの文化圏を大運河で結ばれ、一つの文化群となった。このような文化は融合したもので、中華文明の精髓とも言われる。

一方、日本の室町幕府は十数回もわたって派遣した遣明使が、着陸してまずは寧波に待機して、入京の許可を待たなければならないのである。許可が下りてから、寧波から船で杭州に行って、そしてここからは京杭大運河を利用して、ほぼ兩岸にある駅を一つ一つ数えて利用して、北京に向かう。

本研究は入明僧の策彦周良を例にして、室町文化と京杭大運河の繋がりを究明してみた。鄭州大学で挙行了した「漢字文化遡源 文字から書籍へ」国際シンポジウムにおける口頭発表した「入明僧策彦周良が持ち帰った中国典籍と文物」は、主に京杭大運河ゆかりのモノから室町文化への影響を分析した。そして、論文「明代における径山禅寺と日本の文化交流」は、上述のモノと違い、専ら精神面に集中し、中国江南五山の首である径山禅寺が中国禅宗文化の日本土着化における役割を解明してみた。結論から言うと、もし明代の中国が室町文化への影響があるとしたら、運河文化はそのなかの最も重要なものではないかと思う。具体的に言えば、以下の通りである。第一、多くの室町文化のルーツを追求すればするほど、京杭大運河に遡れること。第二、大運河と関連ある域外の史料を活用して、中国古代政治・経済・文化・社会などを研究する上で絶好の実物でもあり、中国の悠久たる歴史文明の最も優れた物証でもある。第三、策彦周良の朝貢日記『入明記』の文献価値を再認識することができた。第四、本研究によって、中国大運河の国際性をもっと広く知らされるだけでなく、運河兩岸地区の環境保護の意識を喚起させ、持続発展できるような政策の制定を促そうとする。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：入明僧策彦周良が持ち帰った中国典籍と文物

発表者名：陳小法

会議名：「漢字文化遡源 文字から書籍へ」国際シンポジウム

日時：2010年9月10日

場所：鄭州大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名：明代径山禅寺與日本的文化交流 (日本語：明代における径山禅寺と日本の文化交流)

発表者：陳小法

掲載誌：『人物往来與東亜交流』(王勇監修、光明日報出版社)

掲載時期：2010年5月

ページ：285～296

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)